



函館市臨海研究所って こんなところですよ！

【はじめに】

函館市では、平成15年（2003年）に函館国際水産・海洋都市構想という計画をつくり、『世界の水産・海洋研究の中心になるまちづくり』を目指しています。

その中で、「マリンサイエンス：海に係わる研究を進めて、新しい技術や産業を生み出そう」といったことや、「レトロ&フューチャー：函館の歴史的な街並みを生かし、その中で快適で未来を見つめた暮らしを生み出そう」といったこと、そして「**函館まるごとテーマパーク**：異国情緒豊かで文化的な街並みの中で、研究者が楽しみながら研究できるまちをつくろう」という3つのキーワード（考え方）の下で、様々な事業に取り組んでいます。

【この研究所の目的】

函館市臨海研究所は、こうした取り組みのシンボルとなり、水産・海洋に関する研究をしてもらうための貸し研究室として、平成19年（2007年）4月にオープンしました。

もともと、この建物は、大正15年（1926年）に「**水上警察署**」として建てられたものです。その後、昭和27年（1952年）に「**函館西警察署**」となりましたが、昭和59年（1984年）から使われていなかったので、この歴史ある建物を水産・海洋の研究所として活用することとしたのです。



【建物】

大正時代の古い建物は解体しましたが、今の建物も、正面玄関部は曲線で仕上げ、玄関両脇の太い4本の柱や縦長の窓などによるデザインのほか、水上警察時代の名残である物見塔も残すなど、元の建物と同じ外観で建てなおしました。（2階のメモリアルホールには、大正時代の建物ができたときの写真も展示しています。）

建てなおすに当たっては、階段や腰壁の石、車止めなどは古い建物で使用していたものを再利用しました。外壁も、小さな石を練り込んだモルタルの表面を水で洗い流す「**洗い出し工法**」という昔のやり方で仕上げ、ざらざらとした石造りのような質感を出しました。



大正15年の階段



腰壁と車止め



洗い出し工法による壁

【この場所】

研究所が建っているこの場所は、江戸時代に松前藩が海上交通の税金を徴収するための役所が建っていた場所で、江戸時代の終わり（1854年）にはアメリカ東インド艦隊司令長官ペリー提督が率いる艦隊が函館（当時は箱館）にもやってきて、この場所から上陸しました。当時、ここには「沖之口役所」という建物が建っていましたが、ペリーはここに特設市場を開かせ、衣類や塗物・陶磁器類などの買い物をしています。



また、ここが「函館船改所」という名称で使われていた明治11年（1878年）には、東京大学の初代動物学教授となったアメリカの動物学者エドワード・S・モースが、貝類などの標本作成のために函館に滞在し、この建物の2階を「臨海実験所」として使用しました。



モースは、ここを拠点に、7月から8月にかけて函館や札幌などを巡り貝殻標本を作成しましたが、それらは函館仮博物館場（現在の市立函館博物館）に寄贈されたという記録が残っています。（その当時の標本と同じものが、1階の多目的展示ホールに置いてあります。）

ということで、この場所は、昔から水産・海洋の研究をするところとして使われていたというのも何か縁を感じます。

【入居企業】

今、この研究所には5つの企業が入居して、海藻を活用した化粧品などの研究や海洋情報を集めるための調査機器の開発といった研究をしています。

研究している様子は、ガラス越しに自由に見学できるので、どんな研究をしているかじっくり見てみてください。

企業名等	本社	研究の概要
(有)バイオクリエイト	函館市	道南に生育する海藻由来機能性成分の応用研究
(株)環境シミュレーション研究所	埼玉県川越市	水産海洋データの収集および配信システムの開発
(株)ソニック	東京都西多摩郡	小型低価格計量魚群探知機の研究開発
環境創研株式会社	日高町	重金属分離技術などの自社開発技術を利用した機能性食品等の開発
海藻増養殖技術研究会	函館市	砂浜地帯におけるガゴメ昆布の増養殖に係る構造物の開発

函館市臨海研究所

〒040-0052 函館市大町 13-1

TEL : 0138-27-7301

FAX : 0138-27-7302

E-mail : marine@city.hakodate.hokkaido.jp

URL : <http://www.city.hakodate.hokkaido.jp/kikaku/sangaku/rinkai/index.htm>

2011. 7. 1